



初めまして・・・

このたび、浜松文芸館に着任いたしました下石精子（しもしせいこ）と申します。前館長同様、よろしくお願いいたします。

季節は、春から初夏へ。この時季になると思い出すのは、「目には青葉 山ホトトギス 初鯉」素堂の句です。この文芸館が鹿谷にあった頃は、自然に恵まれそれこそホトトギスやウグイスの声に初夏の到来を感じたものだと思いました。確かに、町中にある今は、自然とは遠くなってしまいましたが、窓越しに見える街路樹の葉もまぶしい新緑に変わり、輝きを放っています。ここクリエート浜松の5階に移転・新設してから2年目を迎えた浜松文芸館です。場所は変わっても浜松文芸館の担う使命は変わりません。浜松の文芸の継承と振興、更には創造のために、展示をはじめ様々な講座開催を通じて貢献していきたいと考えます。どうぞ、足をお運びください。ご参加ください。

この浜松文芸館から、また、新たな出会いが生まれ人と人との絆が深まっていく、市民の皆様が開かれた文芸館の運営をしていきたいと思っております。

収蔵展 浜松ゆかりの文人たち

ただ今 開催中！

5月1日（日）～7月24日（日）

浜松ゆかりの文芸人たちの顕彰事業の一環として、
鷹野つぎ（作家）・内田六郎（俳人）・小百合葉子

（劇団創始者）の3人に関する本館所蔵の資料を展示しました。その自筆原稿や写真、愛用品等を見ていると、まるで作者が目の前にいるような思いになります。例えば、鷹野つぎの細かくびっしり書き込まれている自筆原稿から、彼女の物事をしっかり観察し、それを丁寧に言葉にしていくという創作活動を垣間見ることができます。また、雑誌に掲載された随筆を読むと、「子供の喧嘩に親がでるのはいかなものか」「自分の子に注ぐ笑顔をよその子にも注げる親に」など、今を生きる私たちにも十分通じる彼女の鋭く豊かな感性や、厳しい凝視を感じ、思わずなるほどとうなずいてしまいます。彼女の師である島崎藤村だけでなく、作家・藤枝静男も鷹野つぎを高く評価していました。ちなみに、その藤枝静男が鷹野つぎのことを書いた自筆原稿も展示してあります。その他いろいろな発見と感動に包まれることでしょう。皆様も、是非、時と空間を越えて作者と対峙しおしゃべりをしてみてください。



◇浜松文芸館講演会 講師 和久田雅之先生「浜松文学紀行」を掲載します！→裏面

浜名湖畔伊左地に生まれる

「森の水車」「かえり船」「星の流れに」ほか数々の名曲を作詞した清水みのる（本名實）は、浜松駅から館山寺に向かう通称館山寺街道の中間地点、浜名湖東湖畔の浜名郡伊佐美村伊左地135番地（現浜松市）に明治36年（1903）9月11日、村医者清水米造・いわ夫妻の次男として生まれた。父米造は丹後（現京都府北部）の国の出身で御典医をしていた佐伯宇吉の長男として生まれたが、当時佐伯家の車夫をしていた宇吉の弟清水忠八と明治17年3月10日養子縁組を結び、清水姓を名のるようになった。長ずるに及び米造は医師の免状をとって、実父と同じ医者になったのである。實の上に二人の姉（虎枝と止と戈枝）と兄（貫一）がいた。兄貫一とは3歳、長姉虎枝とは9歳離れていた。その後、弟涼亭と妹千代が生まれた。母いわは、野末半三郎・しゅんの次女として、慶應3年（1867）8月28日、静岡県敷地郡（現磐田市）に生まれ、明治22年7月4日米造と結婚している。

春霞の真昼の湖 夕風の夏の湖 靄立つ秋の朝の湖 粉雪降る冬の夜の湖

僕は湖郷、浜名湖の畔で生まれ、育った事をどんなに幸福に思っているか知れない。若し僕が浜名湖畔で生まれなかったら、「ふるさとの燈台」も「かよい船」も「ふるさとの湖」もその他一連の湖畔、船ものもこれほどには作れなかったであろう。

（昭和30・7・10）

これは、みのるが52歳の時の述懐である。詩集「わが浜名湖」の扉に、彼はつぎのように書いている。

「湖郷」とは私の新造語で他に見られる熟語ではない。しかし浜名湖畔に生まれ育った私には、郷里と思い出につながる言葉として敢えて使用し、亡き母を偲ぶ望郷の思いをこれに寄せているものである。

また、同題の詩「湖郷」に、彼は浜名湖を次のようにうたっている。

青い湖 青い空 霧と靄のベールをはがした 春を待つ浜名湖は どこまでも澄みきっている
どこまでも透きとおっている / かみそりの刃のような入り江 幾つかのクレヨンで 描いたよ
うな岬 鷗と白帆の影が 美しい点描となって ぼくに素朴な詩ごころを かきたてる / 枯れ
葦のそよぎ 小波のささやき 崩れ岩の渚に佇めば 今もなお 遠い日の夢を甦らせる この湖畔
/ そして 夕映えの美しさ、哀しさ 忍びやかに迫る、夕風は ぼくの心を、また 湖上にいざな
う （以下略）

浜名湖は詩人清水みのるにとって、まさに「魂のふるさと」なのである。

みのるの子供の頃、「伊左地 佐浜の肥とり男 杓ひしやく かついで かめ覗く」という唄がうたわれていたが、今を思うと隔世の感が深いという。（昭和33年「浜松百選」）

さらに57年経った今、浜名湖とその周辺は景観はもとより、生活、人情、世相等々大変貌、当時を偲ぶよすがもないが、唯一清水みのるの作品の中に永遠の命を吹き込まれて時間を超えて生き続けている。